

朗 読 文

鎌倉に咲く花は格別に美しい。むろんそれらの花は、ここだけにあるというものではなく、どこでもみかける花ばかりである。それらの花が、ひとときわ生き生きとして、花がこんなにも美しく、可憐に咲くものかと、あらためて感じさせるのが、鎌倉の寺々の境内けいだいに咲く花であろう。

鎌倉の寺は、花の寺でもある。それらの寺は、鎌倉を取り囲んである谷ごとの、その突きあたりにある。深い緑に覆われ、石段、積石などが、谷から湧き出るような霧に包まれ、しずくを溜ためて苔こけが光る。石のまわりには下草が茂る。そうしたもののさびた、しっとりとした雰囲気のなかにあつて、それぞれの寺がもつ歴史の重みは、ただでさえ人の心を打たずにはおかない。それに加えて花がそれに彩りをそえている。花は、花々だけを見るとときよりも、あたりの自然や、歴史のなかに溶け込んで咲くときにこそ、より深く人の心をとらえるのであろう。

絢爛と花をつけ、豊満な美女を思わせるカイドウ、枯淡こたんは境地に達した禅僧ぜんそうを思わせるような梅の古木、小さな可憐な花を、参道脇や墓石の根元などにひっそりと咲かせ、ほかの場所ならば見すごされてしまいそうな胡蝶花ことうなど、あげれば数えきれないほどの花木や草花が、春の桜、初夏の新緑、秋の紅葉とともに、それぞれにところを得て境内に趣をそえ、鎌倉の四季を演出しているかのようである。自然との融合を悟道ごどうに通じるとし、花がよく映える鎌倉の寺では、住持じゅしする人も自らそれをつくしむ。そこに咲く花の多くはそうした丹精がこめられたものばかりである。花をたずねて訪れる人々は、自ら弾の心にもふれて、それらの花が数百年も前から歴史を見つめている花でもあるかのようにさえ思われるのである。

紅葉の季節ともなれば、鎌倉を取り囲む三方の山や、谷の奥深く、寺社のあちこちに、カエデ類や、ハゼ、ヌルデ、イチヨウなどの木々が鮮やかに色づいて、古都は錦繡きんしゅうの装いを見せるのである。